

上京遺跡

—上御霊中町の調査—

2015年

古代文化調査会

上京遺跡

—上御霊中町の調査—

2015年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市上京区烏丸鞍馬口下る東入上御霊中町他において、大和ハウス工業株式会社によるマンション建設に伴い実施した上京遺跡（15S073）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大和ハウス工業株式会社より委託を受けた古代文化調査会の水谷明子が担当し、家崎孝治が補佐した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は水谷がおこなった。
5. 図面及び遺物整理、製図トレースは水谷が、遺物実測は板谷桃代が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。
7. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（相国寺・船岡山）、国土地理院発行の25,000分の1の地図（京都北部）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
9. 遺構番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈 家原圭太 馬瀬智光 奥井智子 梶川敏夫 片山雅之 熊井亮介 熊谷舞子
黒須重希子 佐藤 歩 鈴木久史 西森正晃 新田和央 長谷川行孝 平尾政幸
堀 大輔 前田義明 松本昭仁 宮原健吾 山本雅和
（株）明輝建設 （株）浅沼組 （株）大高建設 （公財）京都市埋蔵文化財研究所
大和ハウス工業（株） （株）ユマ設計 日本リグランド（株）

本文目次

上京遺跡・上御霊中町の調査

I 調査の経緯	1
II 遺構	3
III 遺物	13
IV まとめ	21

図版目次

図版1 遺跡	1 東半部第1面全景（北東から） 2 東半部東部第2面（北東から）
図版2 遺跡	1 東半部東部第3面（東から） 2 東半部第4面全景（東から）
図版3 遺跡	1 東半部第1面北東角部（北東から） 2 東半部第1面南西角部（北東から） 3 土壙47・溝53（北東から） 4 石組58（西から） 5 土壙15（南から） 6 土壙81（南から） 7 石組95（南東から） 8 土壙109・107（東から）
図版4 遺跡	1 建物1（北東から） 2 建物2（北から）
図版5 遺跡	1 西半部第1面全景（西から） 2 土壙170・171（南から） 3 石組146（南から） 4 石組168（北西から） 5 竪穴住居175（東から）

- 図版 6 遺物 柱穴131・土壙109・170・15出土遺物
 図版 7 遺物 土壙15・柱穴6・土壙81・84・溝53出土遺物
 図版 8 遺物 溝53・土壙84・81・105・156出土遺物
 図版 9 遺物 土壙62・溝53・土壙81・86・84・76・石組58・168出土遺物
 図版10 遺物 土壙152・石組168出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査地位置図	2
図 3	調査区配置図	2
図 4	北壁断面実測図	4
図 5	東壁断面実測図	5
図 6	第 1・2 面遺構実測図	6
図 7	第 3・4 面遺構実測図	7
図 8	竪穴住居175実測図	8
図 9	建物 1 実測図	9
図10	建物 2 実測図	9
図11	溝53瓦出土状況実測図	11
図12	土壙47実測図	11
図13	石組58実測図	12
図14	石組95実測図	12
図15	土壙14実測図	12
図16	土壙15実測図	12
図17	竪穴住居175・建物 1・2・柱穴131出土遺物実測図	14
図18	土壙109出土遺物実測図	14
図19	土壙170出土遺物実測図	15
図20	石組58出土遺物実測図	15
図21	土壙14出土遺物実測図	15
図22	土壙15出土遺物実測図	15
図23	軒瓦拓影・実測図 1	17
図24	軒瓦拓影・実測図 2	18
図25	刻印瓦拓影図	18
図26	石製品実測図	20
図27	錢貨拓影図	20

上京遺跡

I 調査の経緯

調査に至る経緯

調査地は京都市上京区烏丸鞍馬口下る東入上御霊中町290番他である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・上京遺跡にあたる。2015年4月、当地に大和ハウス工業株式会社によるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下0.8mにおいて江戸時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査を行うこととなった。調査は2015年6月より開始することとなった。

調査経過

当該地は、御霊神社（上御霊神社）の北西170mの距離に位置し、鞍馬口通りに北面する。賀茂川西岸にあたるこの地は、出雲地方からの移住者が多かったことから、山城国愛宕郡出雲郷と呼ばれ、今も出雲路橋や出雲路を残す地名が残っている。この愛宕郡出雲郷は、郷氏に課した税



図1 調査地点位置図 (1/25,000)

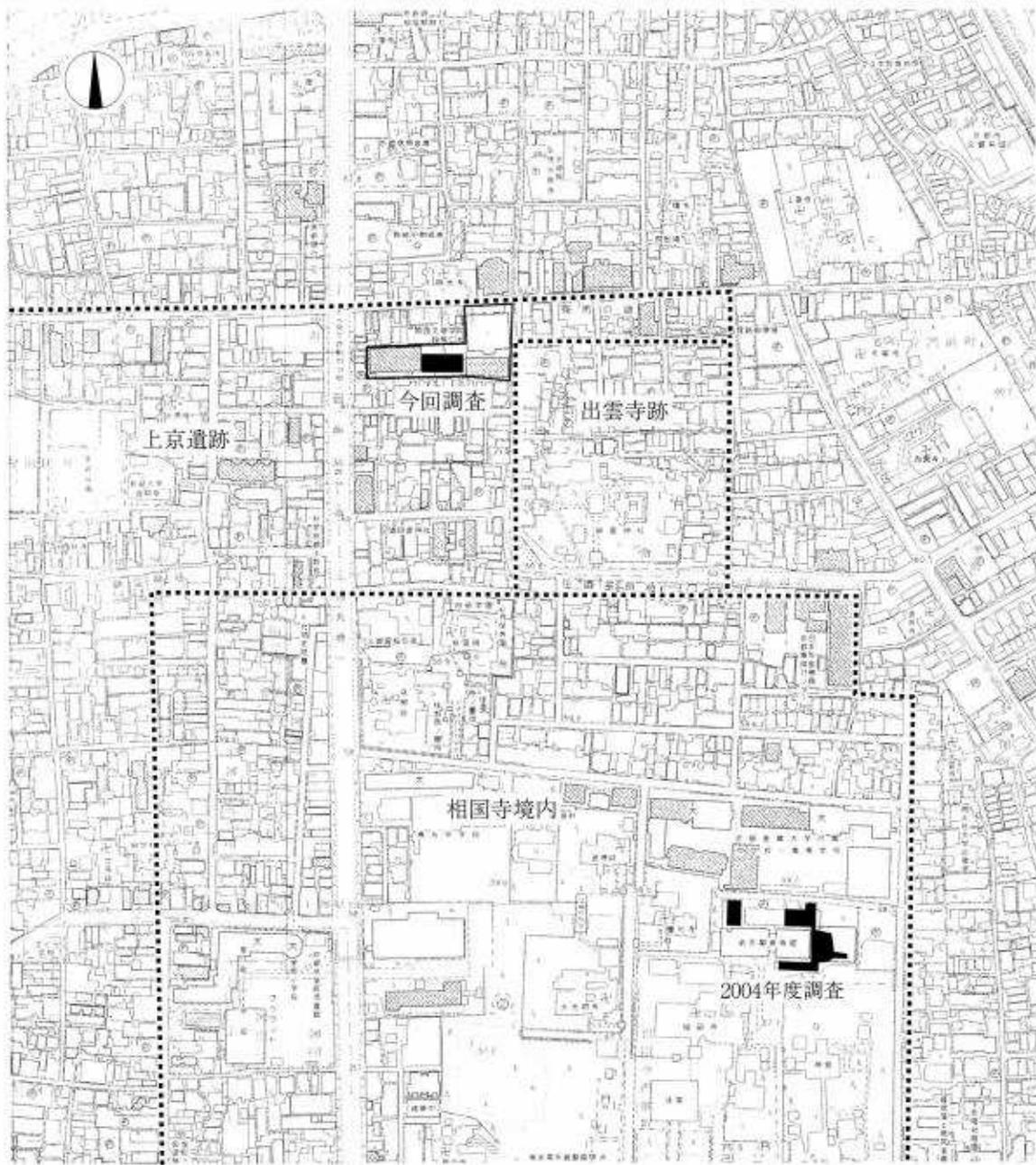


図2 調査地位置図 (1/5,000)

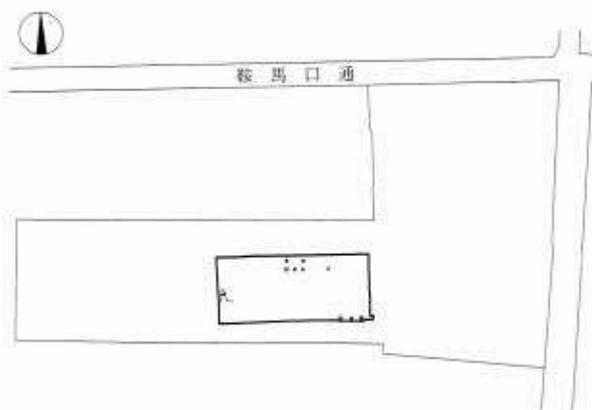


図3 調査区配置図 (1/1,500)

の台帳である正倉院文書の神亀3（726）年「愛宕郡出雲郷計帳」に記されている。平安京遷都以前よりこの地を治めていた出雲氏であるが、平安時代になるとその勢いは衰える。その後、安土桃山時代に織田信長に「大松山」の寺号を与えられたといわれる西福寺がこの地に建てられ、昭和39年に岩倉に移転するまで存在した。

本調査地の近隣調査（図2）としては、2004年に相国寺境内北東に位置する承天閣美術館増築に伴い発掘調査が実施されている。検出された遺構は7世紀半ばから後半の竪穴住居群、8世紀初頭以降の掘立柱建物、平安時代から鎌倉時代にかけての溝、桃山時代の相国寺関連の基壇などがある。

今回の調査においては、安土桃山時代から昭和39年の移転まで存在した西福寺の変遷と、出雲氏に関連する遺構の検出を念頭に置き、試掘調査の結果を踏まえ、機械力により盛土・攪乱層を除去し、調査に着手した。調査は2015年6月8日から開始し、2015年7月30日に終了した。調査面積は390㎡で、実働日数は40日間であった。

調査の方法としては、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（X-106,752.2、Y-21,870）とする、東西方向にアラビア数字を、南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法を行った。

Ⅱ 遺 構

調査区の現代盛土は概ね0.5～0.7m程だが、攪乱が一部深さ約1.5mに及び、遺構を削平している。また、盛土の下は江戸時代以降の土層が地表下0.5～1.3mの厚さで堆積する。その直下で褐色シルトの地山となり、この面で古墳時代から奈良時代の遺構を検出した。

遺構は古墳時代から奈良時代のもの、江戸時代以降のものがあり、遺構の種類としては、竪穴住居、掘立柱、土壇、井戸、溝、埋甕遺構などがある。遺構総数は175基であった。以下、主要な遺構について述べる。

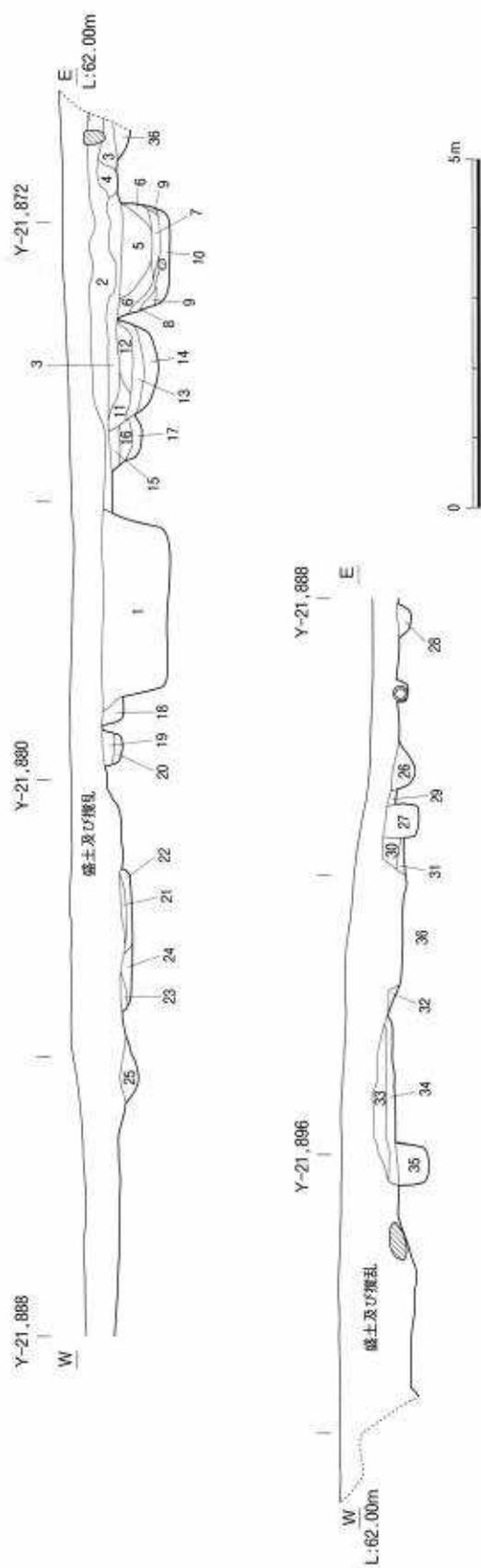
古墳時代から奈良時代

竪穴住居175（図7・8・図版5の5）

調査区西部に位置する竪穴住居址である。大半が攪乱により削平され、西部は調査区外となる。壁溝のみ長さ0.6m検出した。壁溝は幅0.2m、深さ0.07mを測る。床面の堆積は削平により確認できず、地山直上で土師器甕を検出した。

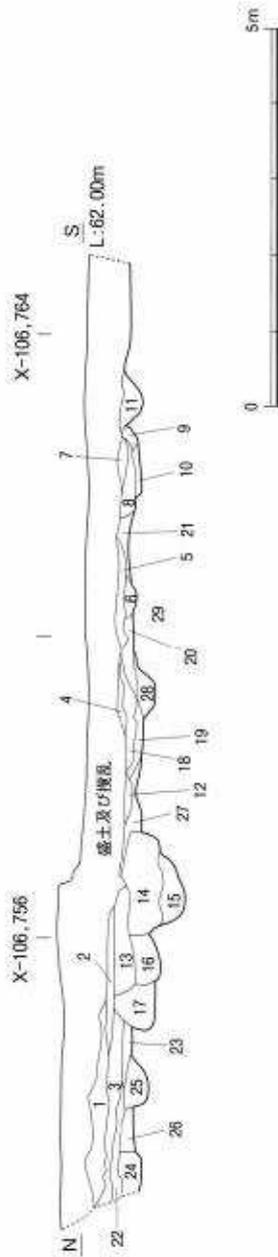
建物1（図7・9・図版2の2・4の1）

調査区南東部に位置する。東西2間分検出した。建物の南側は調査区外となり、全形は不明であるが南北棟であると考ええる。柱間は1.9～2.1mである。一辺0.55～0.65mの方形の掘形をもち、



- | | | |
|------------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭・焼土少量混) | 13 10YR4/1 褐色砂泥 (炭・焼土混) | 25 10YR4/1 褐色シルト (炭・焼土混) |
| 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量混) | 14 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・シルト混) | 26 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭・焼土混) |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・シルト混) | 15 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・シルト混) | 27 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭・焼土少量混) |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土層 2) | 16 10YR3/2 黒褐色砂泥 (泥砂・シルト・炭少量混) | 28 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (シルト・炭混) |
| 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭少量混) | 17 10YR3/1 黒褐色砂泥 (シルト混) | 29 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭・焼土少量混) |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (炭少量・シルト混) | 18 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭混) | 30 10YR2/3 黒褐色砂泥 (灰黄褐色プロック土混) |
| 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (粗砂・炭少量混) | 19 10YR3/2 黒褐色砂泥 (シルト・炭少量混) | 31 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭・焼土少量混) |
| 8 10YR3/2 黒褐色砂泥 (泥砂混) | 20 10YR4/2 灰黄褐色シルト (砂混・炭少量混) | 32 10YR2/2 黒褐色砂泥 |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (砂混) | 21 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭少量混) | 33 10YR2/3 黒褐色砂泥 (灰黄褐色プロック土混) |
| 10 10YR4/1 褐色シルト (砂混混・φ=10cm 礫少量混) | 22 10YR3/1 黒褐色シルト (炭少量混) | 34 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量混) |
| 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (炭少量混) | 23 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭・焼土少量混) | 35 10YR3/3 暗褐色砂泥 |
| 12 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭少量・φ=5cm 礫少量混) | 24 10YR3/1 黒褐色シルト | 36 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山) |

図 4 北壁断面実測図 (1/100)

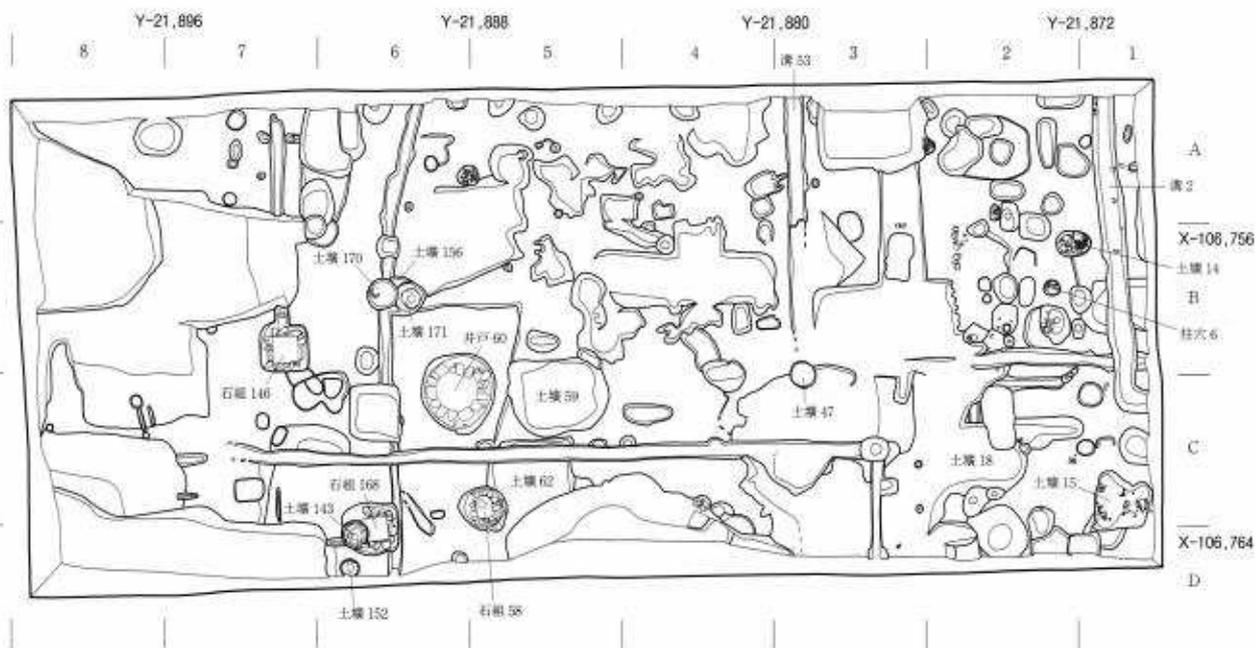


- | | |
|---|--|
| <p>1 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土・砂泥少量混)</p> <p>2 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭・焼土少量混)</p> <p>3 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・φ2-10cm 礫少量混)</p> <p>4 10YR4/3 にふい黄褐色砂泥 (炭・焼土少量混)</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭少量・焼土多量混)</p> <p>6 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (炭・焼土少量混) (溝2)</p> <p>7 10YR3/2 黒褐色砂泥 (焼土少量混)</p> <p>8 10YR4/1 褐色砂泥 (炭少量混)</p> <p>9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (シルト混)</p> <p>10 10YR4/3 にふい黄褐色シルト</p> <p>11 10YR3/3 暗褐色砂泥</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・φ2-5cm 礫混)</p> <p>13 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・φ2-10cm 礫多量混) (土壌86)</p> <p>14 10YR4/4 褐色砂泥 (炭・焼土少量・2-10cm 礫混)</p> <p>15 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量・2-10cm 礫混) } 土壌109</p> <p>16 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥</p> | <p>17 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭・焼土少量・底部シルト混) (土壌107)</p> <p>18 10YR3/1 黒褐色砂泥 (炭・焼土多量・シルト混)</p> <p>19 10YR4/3 にふい黄褐色シルト (炭少量混)</p> <p>20 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量混)</p> <p>21 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量混)</p> <p>22 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・シルト混)</p> <p>23 10YR3/2 黒褐色砂泥</p> <p>24 10YR3/2 黒褐色砂泥</p> <p>25 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭・焼土少量混)</p> <p>26 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量混)</p> <p>27 10YR3/2 黒褐色シルト (炭少量混)</p> <p>28 10YR3/1 黒褐色砂泥 (炭少量混)</p> <p>29 10YR3/1 黒褐色シルト (地山)</p> |
|---|--|

図5 東壁断面実測図 (1/100)



第1面



第2面

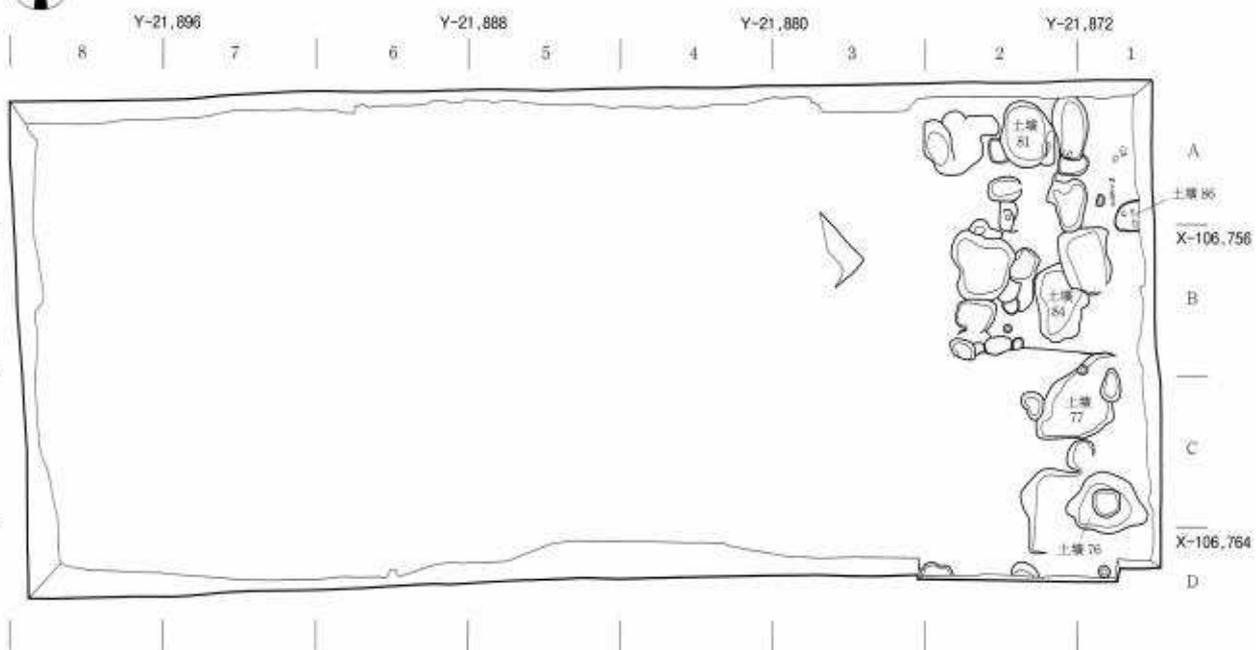


図6 第1・2面遺構実測図 (1/200)

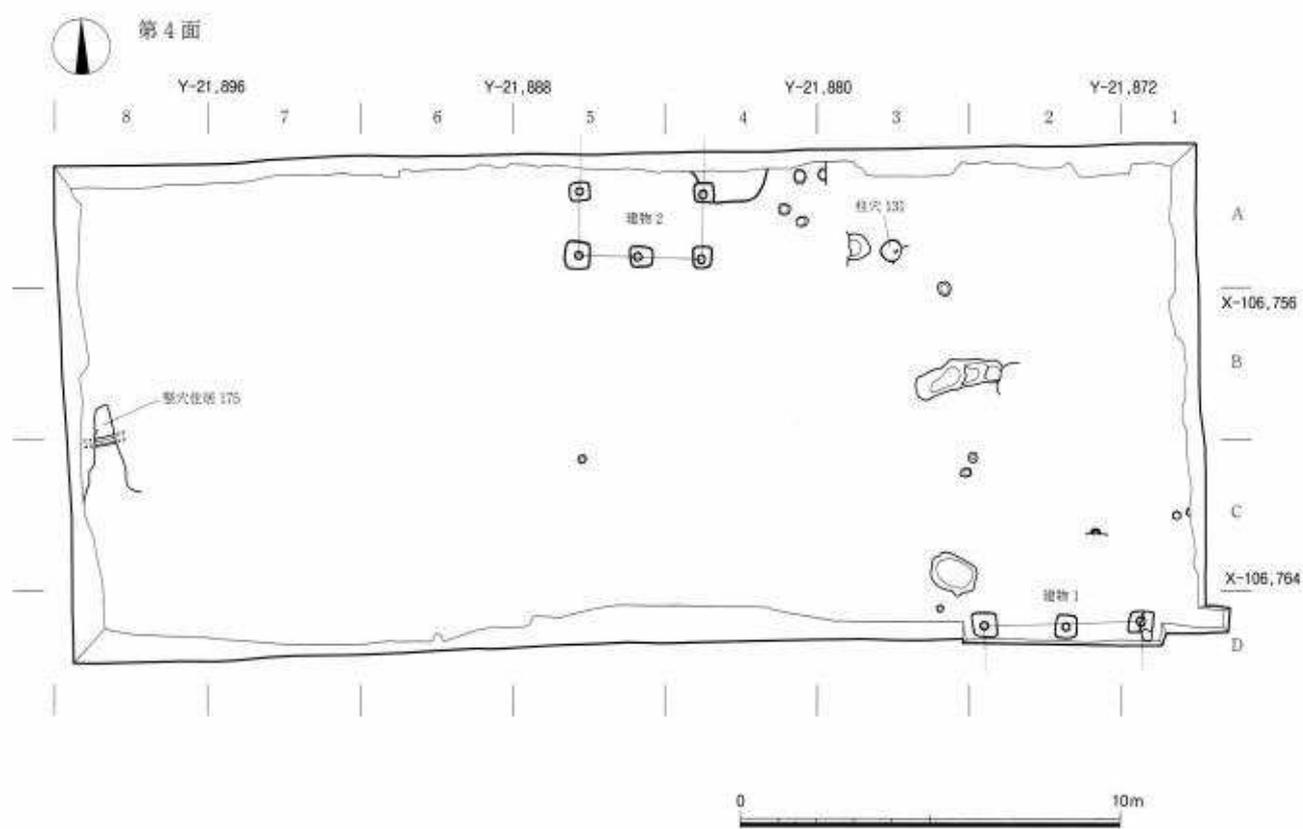
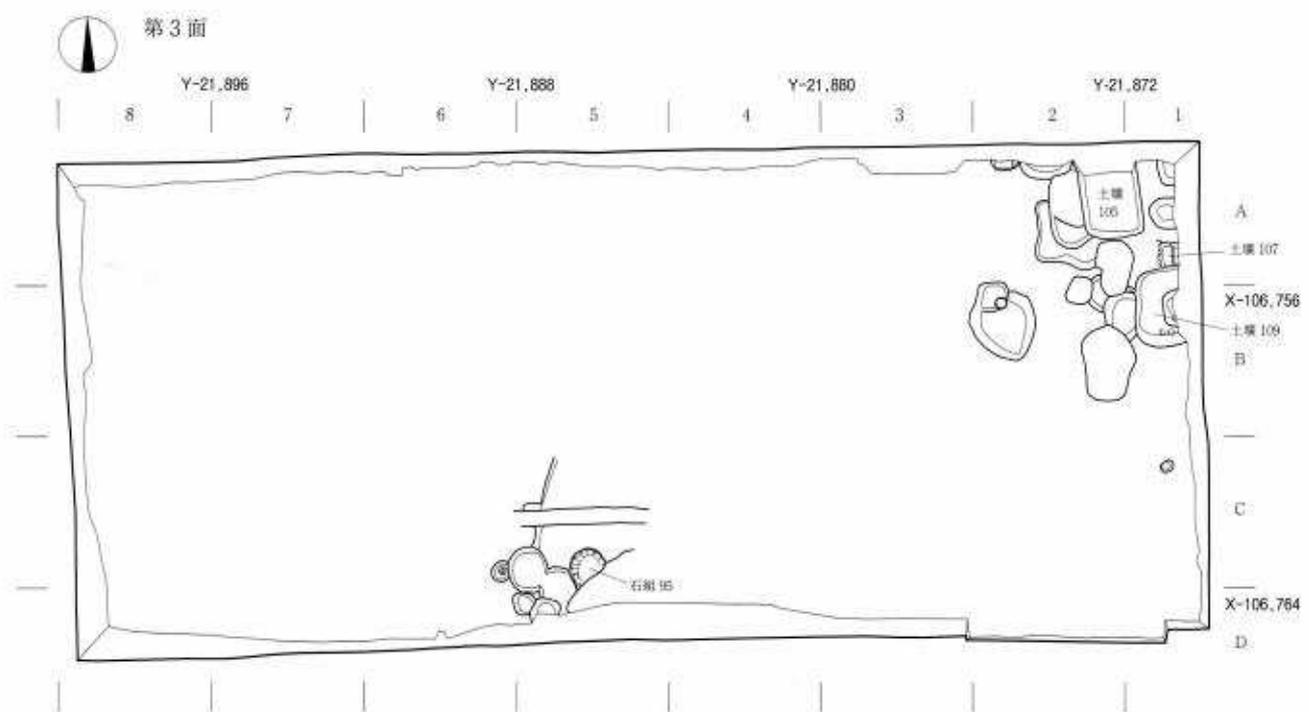


图7 第3·4面遺構実測図 (1/200)

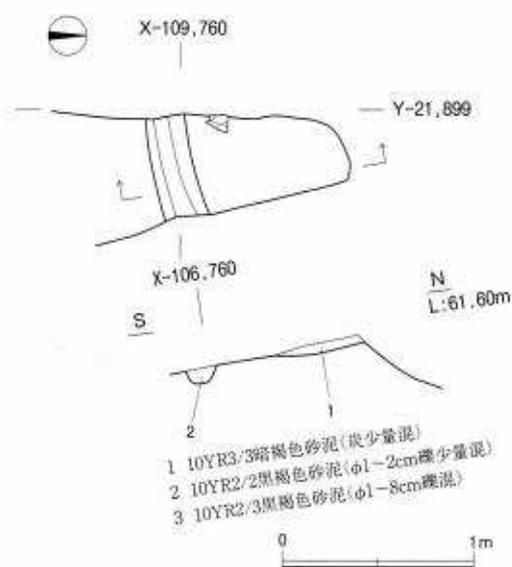


図8 竪穴住居175実測図 (1/40)

であった。完形に近い須恵器杯身が出土した。

江戸時代以降

土壌109 (図7・図版2の1)

調査区東部に位置する土壌である。東部は調査区外となる。南北長2.1m、東西長1m以上、深さ0.7mを測る。掘形はやや丸みを帯びた方形を呈する。埋土は2層に分けられ上層は黒褐色砂泥層、下層は灰黄褐色砂泥層である。上下層ともに多くの土器や瓦が出土した。

土壌170 (図6・図版5の1・5の2)

調査区西部中央寄りに位置する土壌である。径0.8m、深さ0.5mを測り、円形の掘形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層である。天明の大火で焼けたと考えられる瓦や、施釉陶器の鉢が出土した。

土壌171 (図6・図版5の1・5の2)

調査区西部中央寄りに位置する土壌である。土壌170に西部を削平される。径0.8m、深さ0.55mを測り、円形の掘形を呈する。焼締陶器の甕が据えられた状態で出土した。

溝53 (図6・11・図版1の1・3の3)

調査区北部のやや中央寄りに位置する溝である。北部は調査区外となり、南半分は削平が著しい。南北長6.3m以上、幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝内には一部倒れているものもあるが、立てた瓦を隙間なく敷き詰めている。その中には西福寺を指す「西」を刻印した瓦が出土している。雨落ち溝と考えられ、南に流れた水は径20cm以下の礫を充填した土壌47に落ち込む。

土壌47 (図6・12・図版1の1・3の3)

調査区東部の中央寄りに位置する土壌である。径0.7m、深さ0.4mを測り、円形の掘形を呈する。埋土は灰黄褐色砂泥層で、20cm以下の礫を充填する。溝53から流れてきた水を地中に流し落とす役割を持つと考えられる。

柱根跡は径0.2m、深さ0.25~0.4mを測る。柱穴125の掘形から須恵器の杯身片が出土した。

建物2 (図7・10・図版2の2・4の2)

調査区北部中央に位置する。南北1間以上、東西2間分検出した。建物の北側は調査区外となるが、南北棟と考えられる。柱間は1.5~1.65mである。一辺0.5~0.75mの方形の掘形をもち、柱根跡は径0.2~0.25mを測る。柱穴120と柱穴140の掘形から須恵器の杯身片が出土した。

柱穴131 (図7・図版2の2)

調査区北東部に位置する柱穴である。南東部は削平されているが、径0.55mの円形の掘形をもつ。上層は削平されており、検出できた深さは3cm

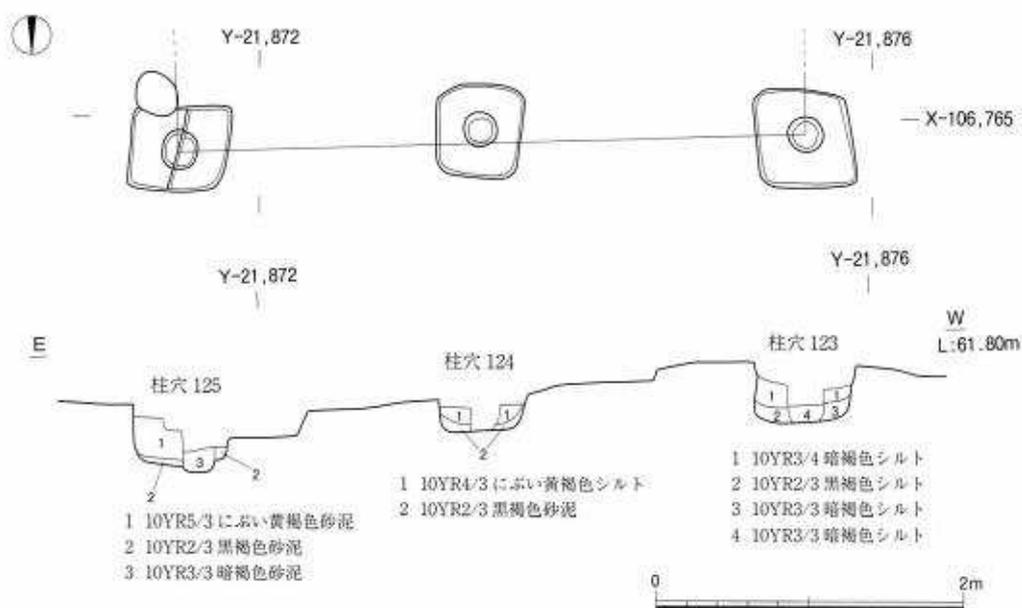


図9 建物1実測図 (1/50)

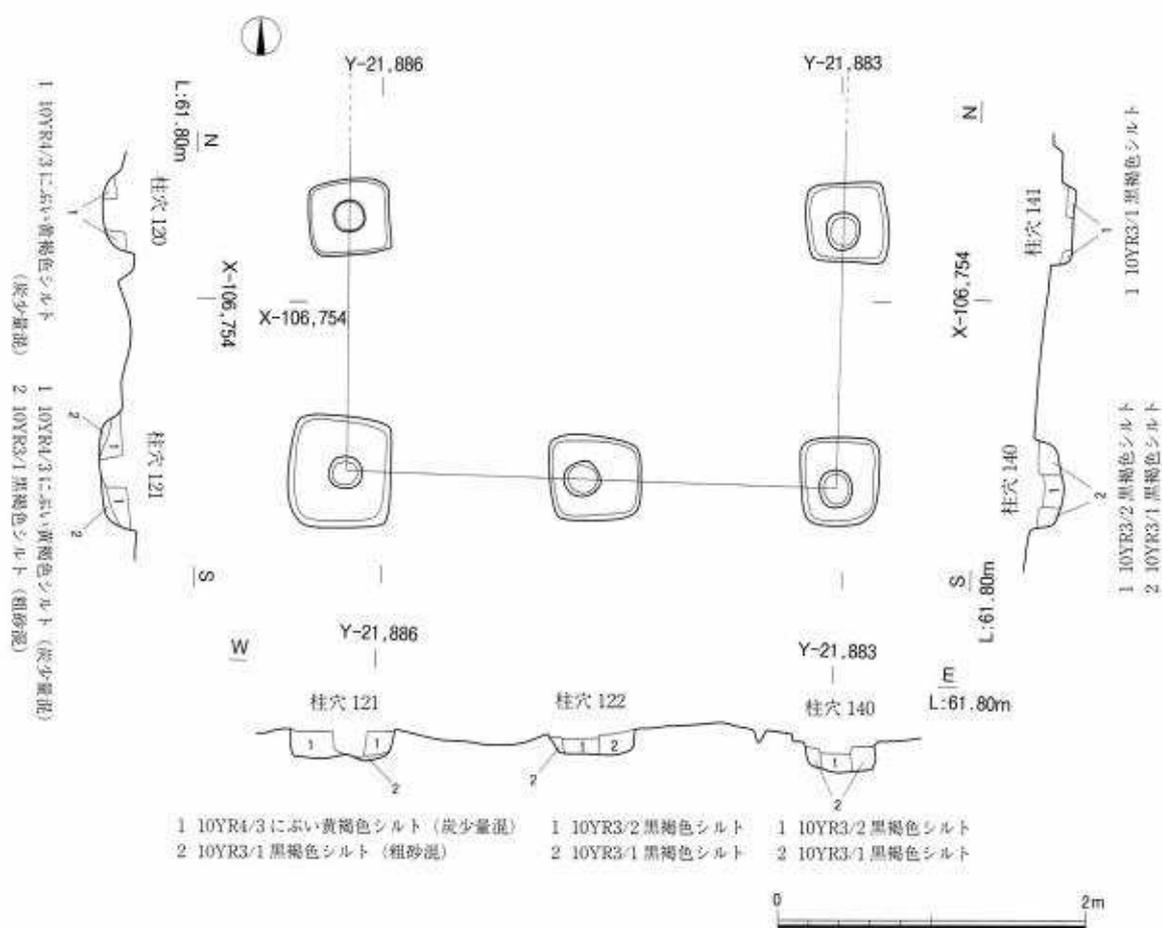


図10 建物2実測図 (1/50)

石組58 (図6・13・図版1の1・3の4)

調査区南部中央に位置する石組遺構である。掘形は南北長1.15m、東西長1.3m、深さ0.45mを測る。石組は方形で、内径の南北長0.6m、東西長0.4mである。10~25cmの石を4段程積む。五輪塔の水輪にあたる石が石組内から出土した。貯蔵穴と考えられる。

石組95 (図7・14・図版3の7)

調査区南部中央に位置する石組遺構である。南東部は削平されている。掘形は径1m、深さ0.25mを測る。石組は円形で、内径0.6mを測り、10~20cmの石を3段積む。

土壇14 (図6・15・図版1の1)

調査区北東部に位置する土壇である。南北長0.7m、東西長0.9m、深さ0.35mを測り、掘形は楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層で、江戸時代中期の土器類が多く出土した。

土壇15 (図6・16・図版1の1・3の5)

調査区南東部に位置する土壇である。南北長1.6m、東西長1.5m、深さ0.3mを測り、掘形は不定形である。埋土は4層に分けられ、何れの層も20cmまでの礫を少量含む。土器類は上層から出土したものが多し。

土壇107 (図7・図版2の1・3の8)

調査区北東部に位置する土壇である。東部は調査区外となり、南部は土壇109に削平される。南北長0.55m以上、東西長0.5m以上、深さ0.35mを測る。西部から2段の石列を検出した。この石列が崩れないように灰黄褐色シルトで土留めしている状態を確認した。

溝2 (図6・図版1の1)

調査区東部に位置する南北方向の溝である。幅0.25~0.35m、深さ0.15mを測る。埋土は2層に分けられ、上層には10cmまでの礫を多く含む。溝の北端は調査区外となり、南端は東方向に直角に曲がりそのまま調査区外へ延びる。江戸中期以降の土器類と焼け瓦が出土した。

土壇81 (図6・図版1の2・3の6)

調査区北東部に位置する瓦溜り土壇である。南北長1.7m、東西長1.4m、深さ0.4mを測り、掘形は楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層で、多量の瓦が出土した。

石組168 (図6・図版5の1・5の4)

調査区南西部に位置する石組遺構である。掘形はやや丸みを帯びた方形を呈し、南北長1.4m、東西長1.5m、深さ0.5mを測る。石組は方形で、内径の南北長は0.55m、東西長は0.8m以上である。10~50cmの石を4段程積む。西側は削平されて石は検出できなかった。北側と東側の石は攪乱を受け、1~2段のみ確認した。その中には五輪塔の火輪にあたる石も使用している。石組内から2.5~3.5cmの土人形や押し型が20点程出土した。

石組146 (図6・図版5の1・5の3)

調査区西部中央に位置する石組の排水枡である。掘形は方形で南北長1.2m、東西長1.3m、深さ0.35mを測る。石組は方形で、内径の南北長0.7m、東西長0.6mを測る。北側の石組みの中ほどに土管を据え、北方向に水を排水するように造られているのを確認した。ガラス製の薬瓶や歯

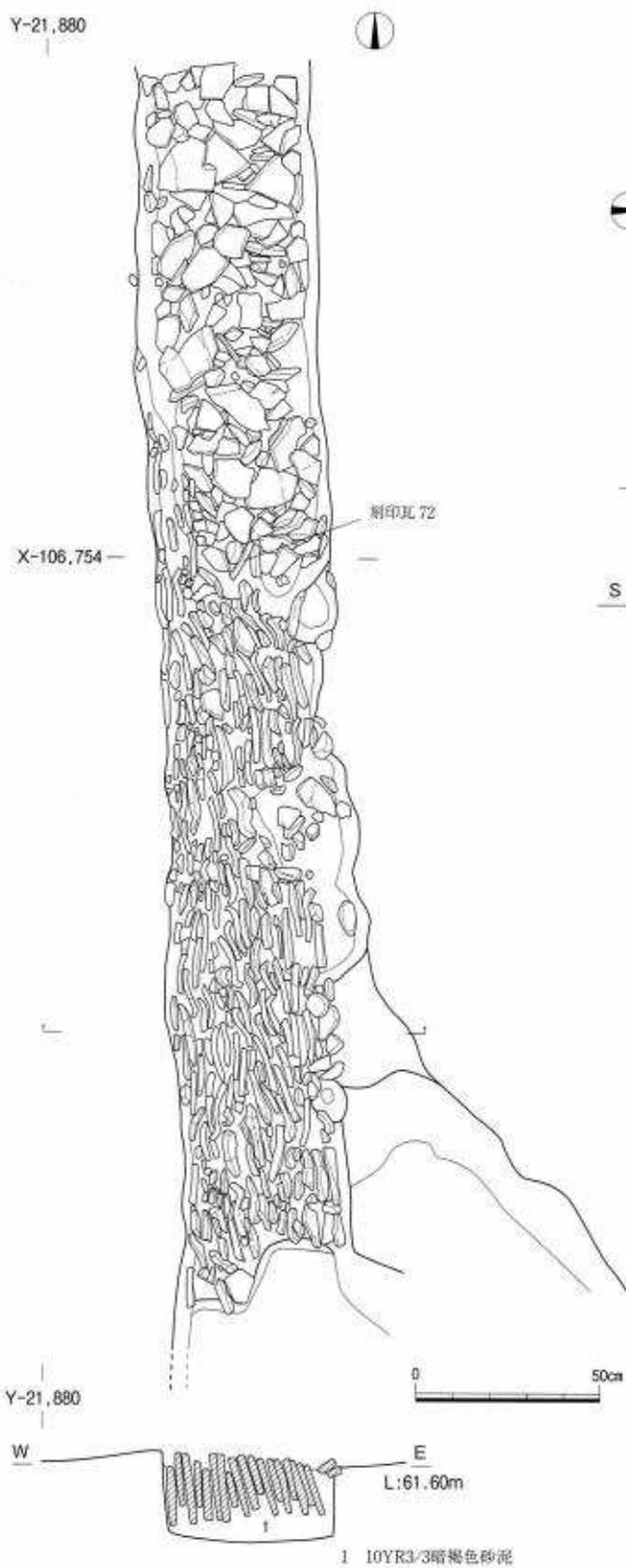


图11 沟53瓦出土状况实测图 (1/20)

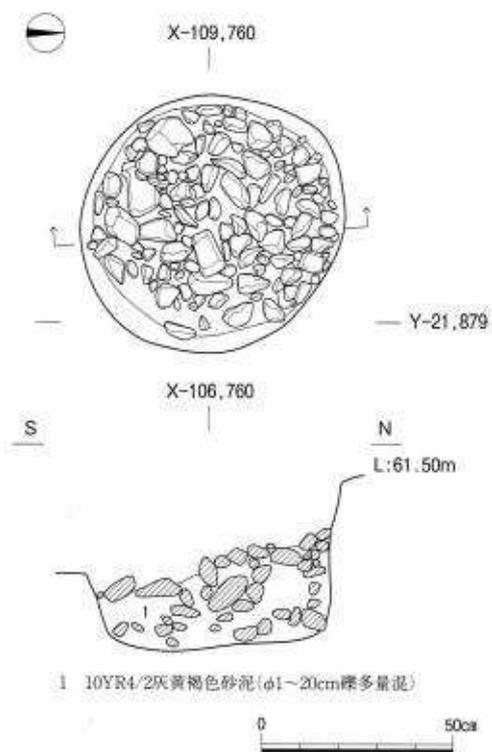


图12 土城47实测图 (1/20)

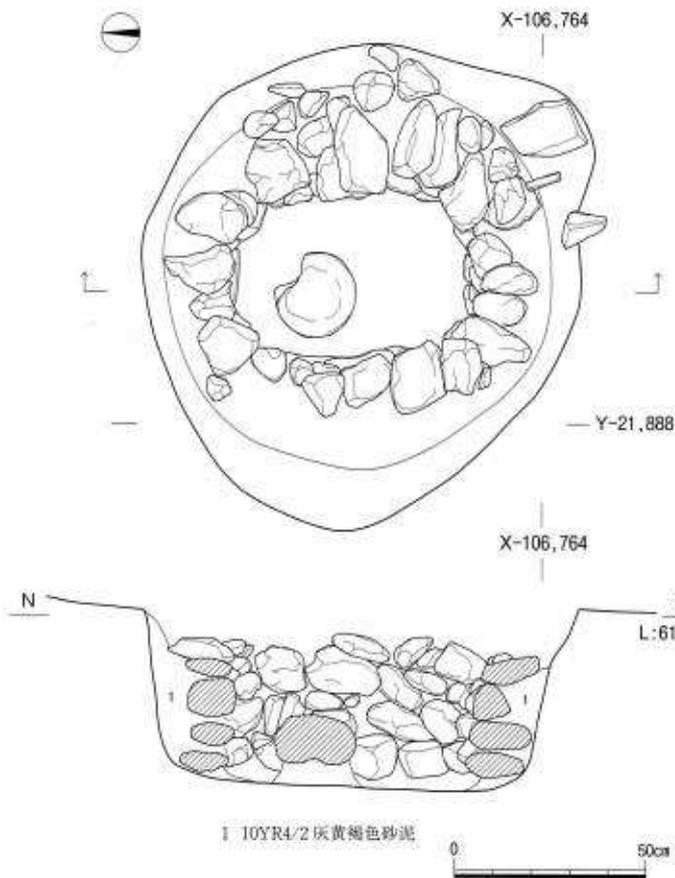


图13 石组58实测图 (1/20)

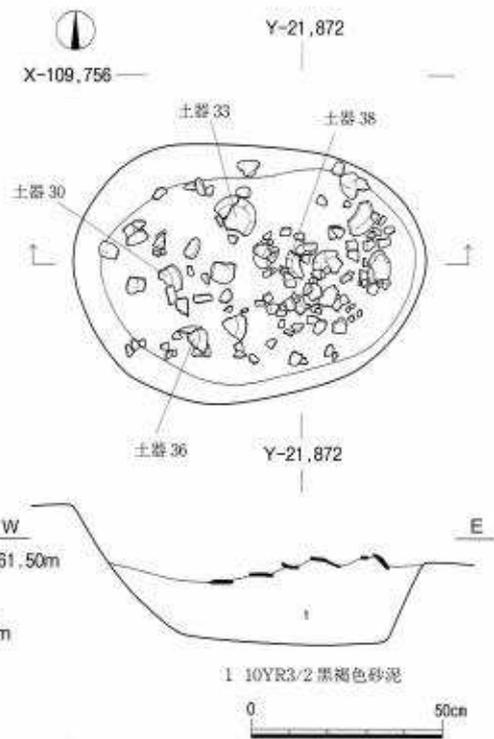


图15 土壤14实测图 (1/20)

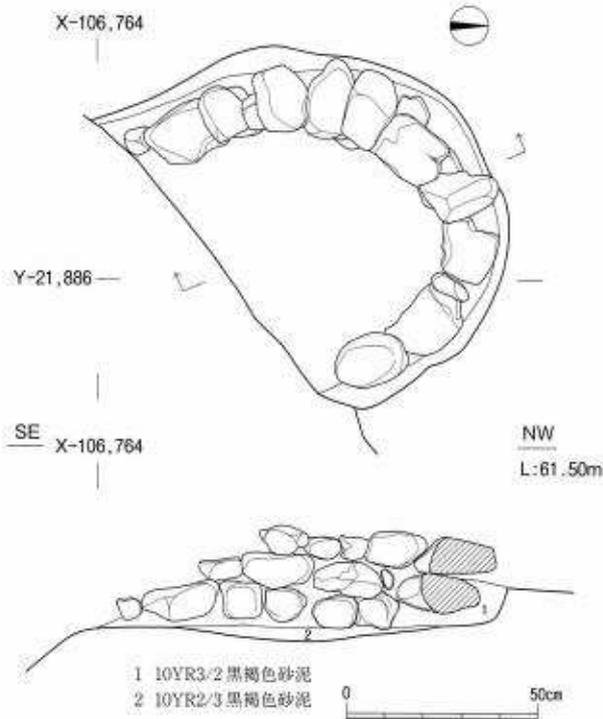


图14 石组95实测图 (1/20)

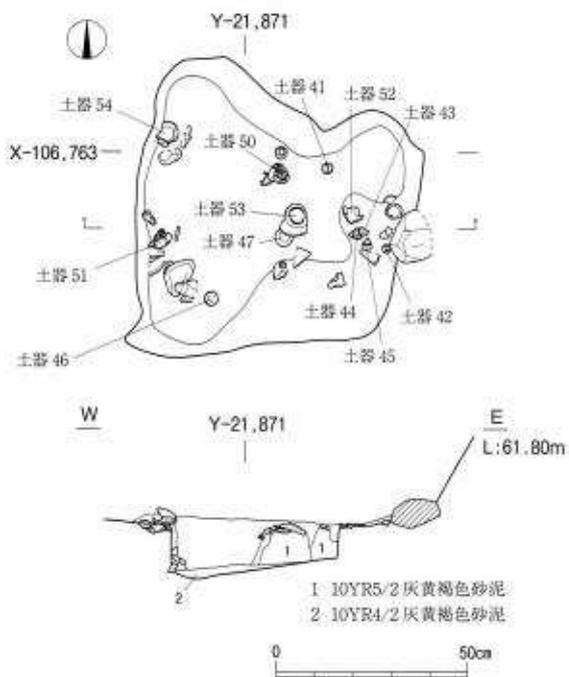


图16 土壤15实测图 (1/40)

ブラシの柄が出土している。

土壙143・152（図6・図版5の1）

調査区南東部に位置する土壙である。土壙143は径0.7m、深さ0.3mを測り、掘形は円形を呈する。土壙152は径0.6m、深さ0.25mを測り、掘形は円形を呈する。いずれも甕を据えた状態であった。トイレ遺構と考えられる。土壙143の甕には墨書で「大」と書かれており、大小で使い分けをしていたと推察する。

井戸60（図6・図版5の1）

調査区中央部やや西寄りに位置する現代井戸である。15～40cmの切り石を積んだ石組井戸である。

III 遺 物

出土した遺物は整理箱に61箱ある。時代は古墳時代から近現代までのものがある。遺物の種類には土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年^{第3}をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

竪穴住居175出土土器（図17）

土師器甕（1）がある。長胴甕の口縁から体部である。外反する口縁部をもち、端部を面取りする。内外面ともに摩耗して調整は不明瞭だが、体部外面に微かに縦方向のハケメ痕が残り、煤が一部付着する。7世紀半ば頃のものとする。

建物1出土土器（図17）

柱穴125より須恵器杯（2）が出土した。杯の口縁端部で、内外面ともに横ナデを施す。柱穴123・124からは土師器小片が出土した。

建物2出土土器（図17）

柱穴140より須恵器杯（3）、柱穴120より須恵器杯（4）が出土した。3は杯の口縁端部で、胎土はやや粗く焼成はやや不良である。4は口径11.2cmで、胎土は0.5mm以下の砂粒を含む。底部から体部にかけては丸みをもって立ち上がる。柱穴121から土師器小片が、柱穴141からは須恵器甕の体部小片が出土した。

柱穴131出土土器（図17・図版6）

須恵器杯H（5）がある。口径9.5cm、器高3.0cmを測る。蓋受けの立ち上がりは体部と明瞭に区分されず、断面は三角形を呈する。底部は平らに成形されている。7世紀半ば頃のものである。



図17 堅穴住居175・建物1・2・柱穴131出土遺物実測図 (1/4)

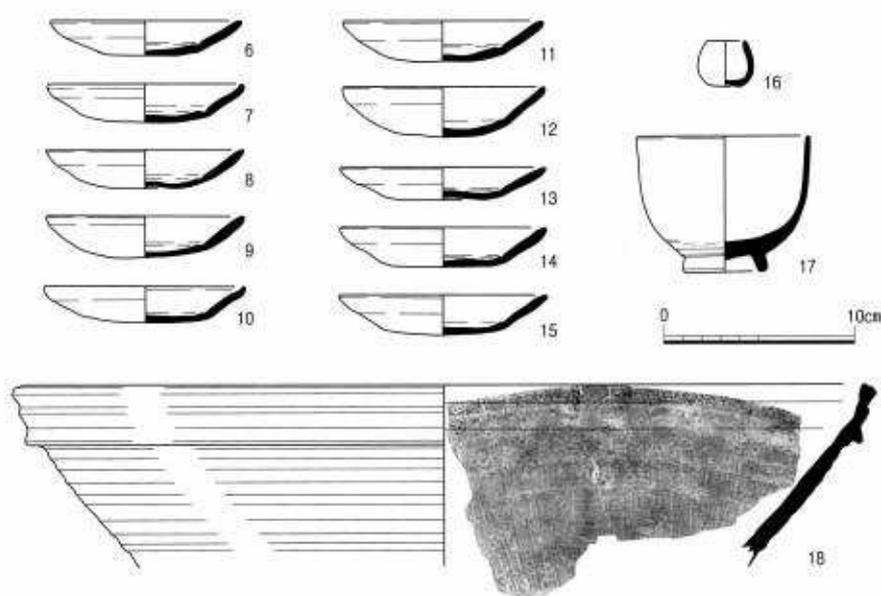


図18 土壙109出土遺物実測図 (1/4)

土壙109出土土器 (図18・図版6)

土師器皿S (6~15)、土師器小壺 (16)、施釉陶器碗 (17)、焼締陶器鉢 (18) がある。皿Sは口径10.1~11.0cm、器高1.8~2.7cmを測る。17は唐津系の鉄釉碗である。18は備前系の播鉢で、口径は45.4cmを測る。17世紀後半。

土壙170出土土器 (図19・図版6)

土師器皿S b (19)、皿S (20、21)、施釉陶器 (22、23)、染付碗 (24) がある。19は口径7.0cm、器高1.4cmを測る。20、21は口径8.2cmと9.4cm、器高1.4cmと1.5cmを測る。21は口縁端部内外面に煤が付着する。22は灯明皿である。口縁端部外面より内面全体を施釉する。23は三足の火鉢である。口径21.2cm、器高19.6cmを測る。底部外面は平らにケズリ、脚を貼り付けナデを施す。径5mmの孔を4ヶ所穿つ。底部内面に墨書が確認できる。江戸中期から後期。

石組58出土土器 (図20)

土師器皿S b (25)、皿S (26)、施釉陶器蓋 (27)、染付磁器 (28、29) がある。皿S bは口

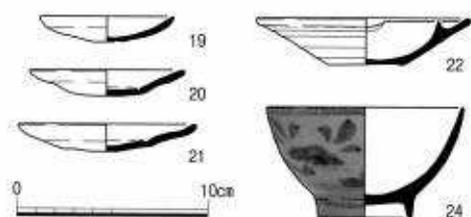


图19 土城170出土遺物実測図 (1/4)

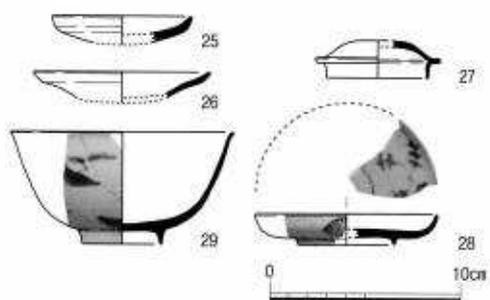


图20 石組58出土遺物実測図 (1/4)

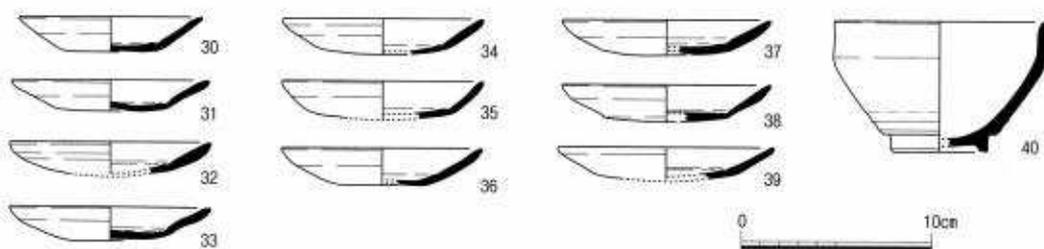
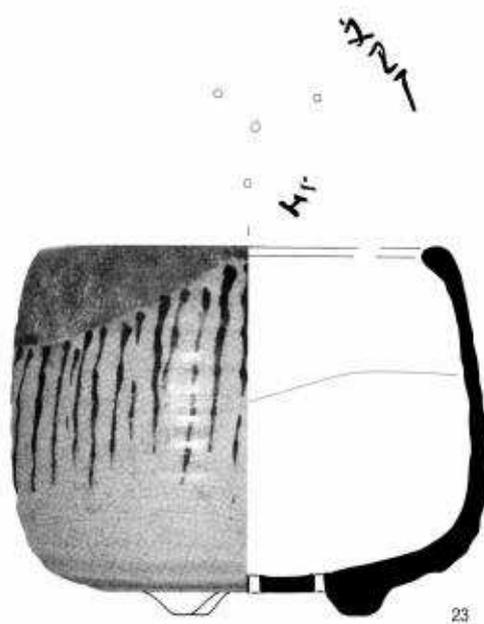


图21 土城14出土遺物実測図 (1/4)

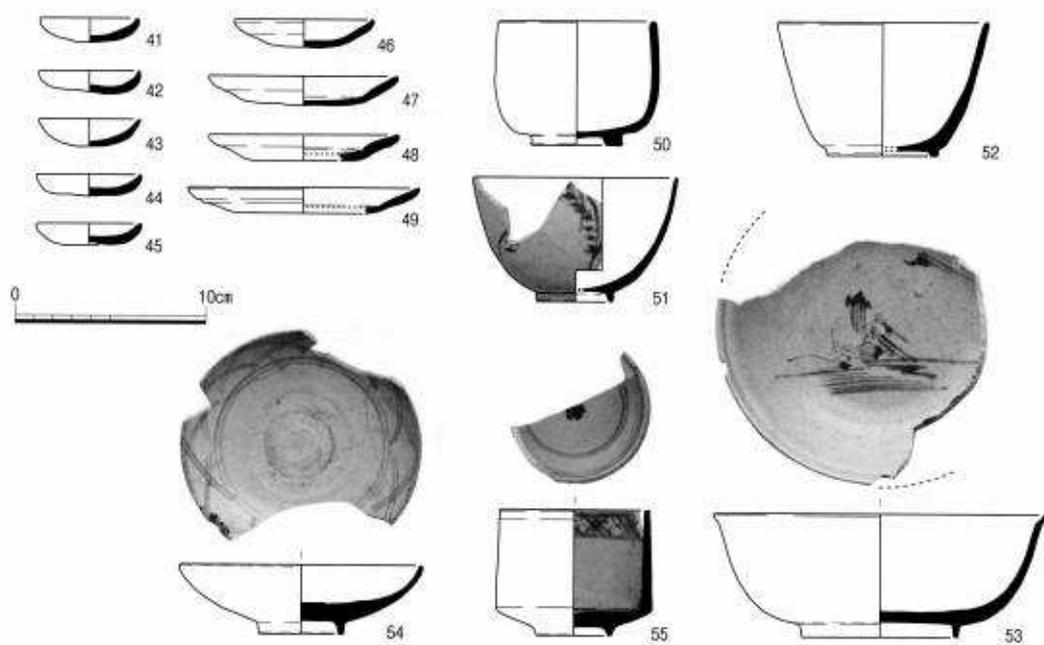


图22 土城15出土遺物実測図 (1/4)

径7.4cm、器高1.5cmを測る。皿Sは口径9.3cm、器高1.4cmを測る。27は美濃瀬戸系陶器の蓋である。上面のみ施釉する。28は小皿である。口径9.7cm、器高1.7cmを測る。江戸中期。

土壙14出土土器 (図21)

土師器皿S (30~39)、天目椀 (40) がある。皿Sは口径9.6~11.4cm、器高1.7~2.1cmを測る。XII期に属する。

土壙15出土土器 (図22・図版6・7)

土師器皿N r (41~45)、皿S b (46)、皿S (47~49)、施釉陶器 (50~53)、染付磁器 (54、55) がある。皿N rは口径5.2~5.6cm、器高1.1~1.5cmを測る。皿S bは口径7.4cm、器高1.5cmを測る。皿Sは口径10.0~12.2cm、器高1.4~1.6cmを測る。47は口縁端部内外面に煤が付着する。51は美濃瀬戸系の碗で、外面に絵付けする。53は京焼風肥前系の小ぶりの鉢で、口径17.7cm、器高6.2cmを測る。底部内面に絵付けを施す。54は染付皿で、底部内面に重ね焼き痕がある。55は染付碗で、見込に五弁花が確認できる。

瓦 類 (図23~25・図版7~9)

三巴文軒丸瓦 (56~61)

56、57は柱穴6出土。56は右巻きの巴文である。尾部が互いに接しない。外区に径0.8mmの珠文を配する。瓦当部側面から裏面にかけて、丁寧なナデを施す。胎土は微砂粒を含み、灰色を呈する。57は右巻きの巴文である。尾部が互いに接しない。外区に径1cmの珠文を密に配する。胎土は5mm以下の小石を含み、灰白色を呈する。58~60は土壙81出土。58は右巻きの巴文である。外区に径1cmの珠文を配する。瓦当部側面から裏面端部にかけて、強いナデを施す。胎土は1mm以下の砂粒を少量含み、灰色を呈する。59は右巻きの巴文である。外区に径1.1cmの珠文を配する。瓦当部裏面はやや粗いナデを施す。胎土は微砂粒を含み、灰色を呈する。60は右巻きの巴文である。外区に径0.9mmの珠文を密に配する。瓦当部側面から裏面にかけて、丁寧なナデを施す。焼きがやや悪く、黄灰色を呈する。61は土壙84出土。右巻きの巴文である。外区に径1cmの珠文を配する。胎土は1mm以下の砂粒を含む。二次焼成を受け、にぶい黄橙色を呈する。

唐草文軒平瓦 (62~69)

62、63は溝53出土。同文で、唐草文を複線で表す。ともに顎部凸面から裏面、凹面に丁寧なナデを施す。62は1mm以下の砂粒を含み、オリーブ灰色を呈する。63は2mm以下の砂粒を含み、灰白色を呈する。64は土壙84出土。中心飾に蓮の横花文を配する。瓦当上端部に横方向の削りを施す。胎土は5mm以下の小石を含み、灰色を呈する。65~67は土壙81出土。65は瓦当上端部に横方向の削り、顎部凸面から裏面、凹面に丁寧なナデを施す。1mm以下の砂粒を含み、灰色を呈する。66は顎部凸面から裏面に丁寧なナデを施す。胎土は1.5mm以下の砂粒を含み、黄灰色を呈する。一部煤が付着する。67は中心飾に桐文を配する。顎部凸面から裏面、凹面に丁寧なナデ、平瓦部凸面は粗いナデを施す。胎土は1mm以下の砂粒を含み、黒褐色を呈する。68は土壙

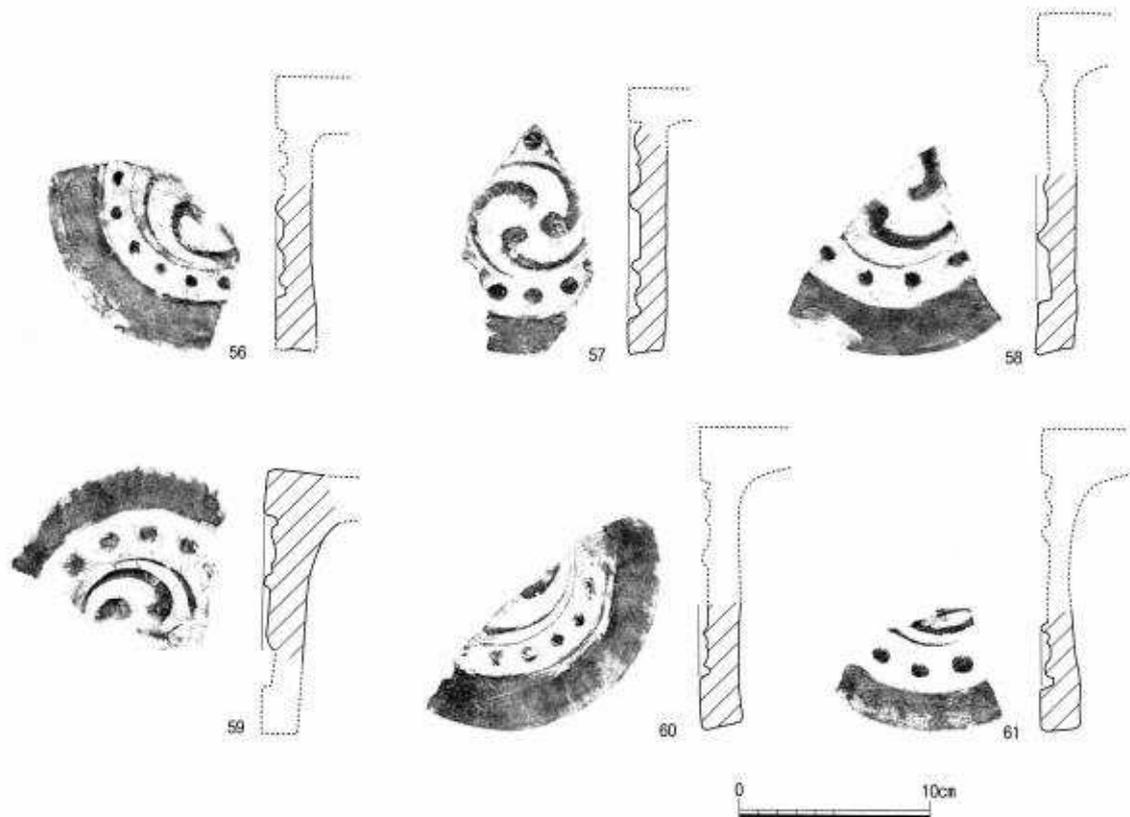


図23 軒瓦拓影・実測図1 (1/4)

105第3層出土。胎土が粗く、1mm以下の砂粒を多く含み、灰色を呈する。69は土壙156出土。顎部凸面から裏面、凹面に丁寧なナデ、平瓦部凸面は粗いナデを施す。微砂粒を含み、灰色を呈する。一部煤が付着する。

軒棧瓦 (70)

土壙81出土。軒丸部は珠文を配した三巴文を施し、軒平部には唐草文を配す。軒丸部、軒平部ともに瓦当部側面から裏面にかけて丁寧なナデを施す。1mm以下の砂粒を含み、オリーブ黒色を呈する。

飾瓦 (71)

土壙61出土。径4cmの大きめの竹管で円文を施す。側面に「貞享 五辰 九月」(1688)の寛書きによる刻印が確認できる。瓦当裏面は強い指ナデを施し、一部削りを施す。胎土は2mm以下の小石を含み、暗灰色を呈する。

刻印瓦 (72~77)

72~74は溝53出土。刻印は小口にあり、二重丸に「西」もしくは「高」。73はやや不明瞭である。75は土壙81出土。平瓦の小口に四葉の刻印がある。76は土壙62出土。棧瓦の小口に刻印があり、○に十。瓦は二次焼成を受けており、にぶい橙色を呈する。77は土壙86出土。小口に刻印があり、○に十。

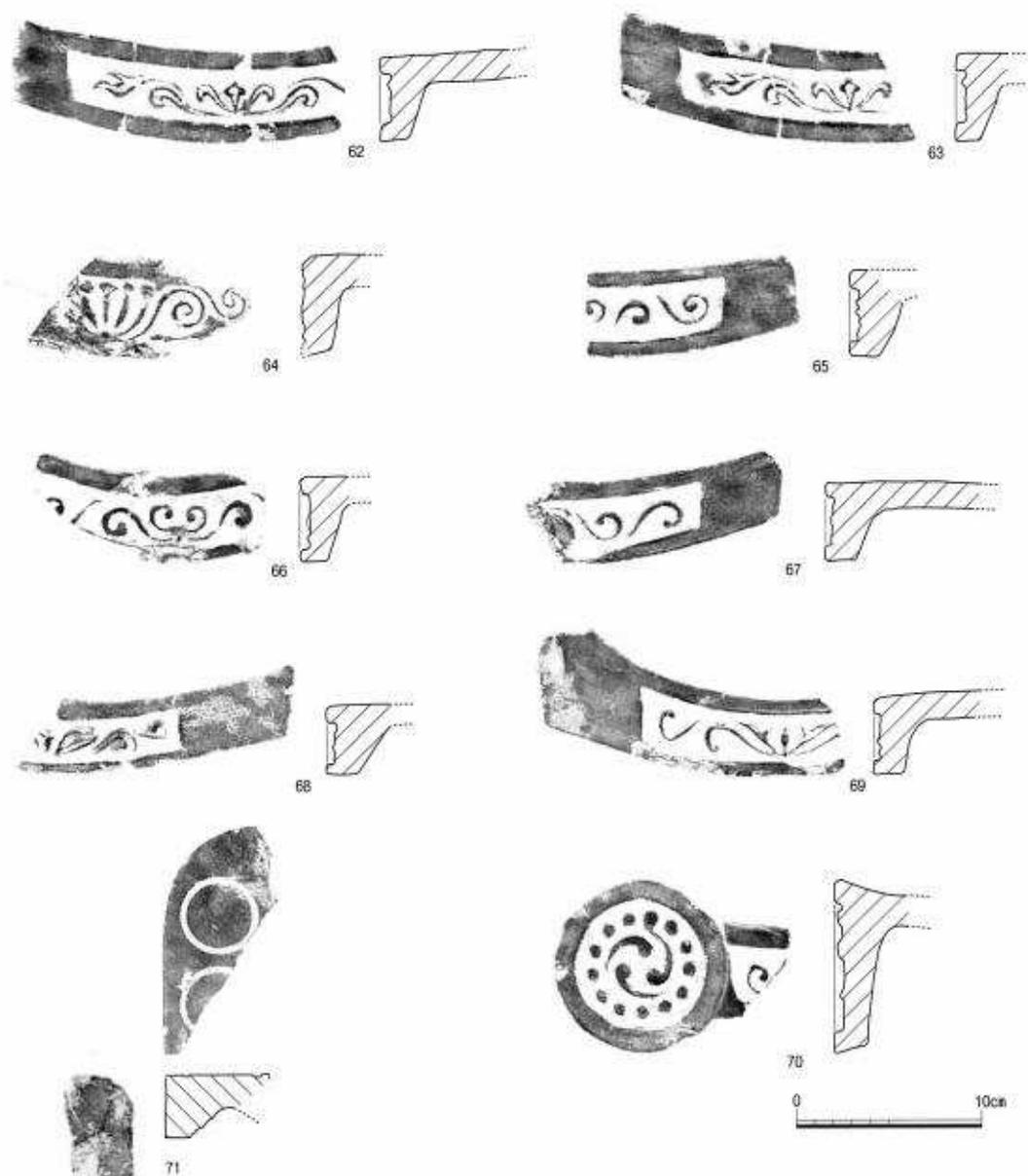


图24 軒瓦拓影·实测图 2 (1/4)

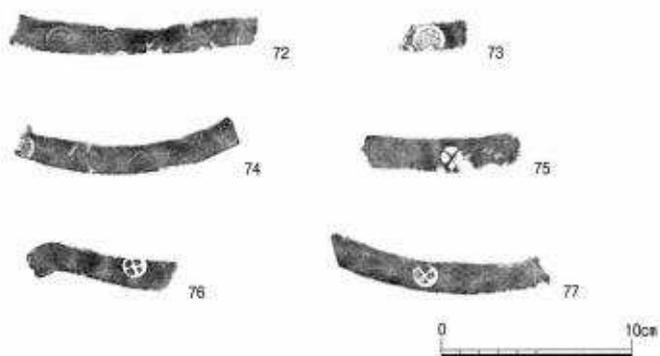


图25 刻印瓦拓影图 (1/4)

石製品 (図26・図版9・10)

硯 (78)

土壙84出土。長方形の硯で、残存長径3.0cm、短径4.1cm、残存する厚さ1.0cmを測る。裏面は剥離する。

砥石 (79)

土壙77第1層出土。長さ9.0cm、幅6.5cm、厚さ1.1cmを測る。片面および側面を砥石として使用する。

五輪塔 (80~82)

80は土壙76第2層出土。一石五輪塔の空輪と風輪部分である。火輪部分がわずかに確認できる。残存高は10.5cm。風輪の側面に梵字で「𑖀(カ)」と刻まれている。81は石組58出土。五輪塔の水輪部分である。最大径22.3cm、高さ15cmを測る。上下に径9cm、深さ0.8mmの窪みがある。一部欠損している。何らかの重石として使用か。82は石組168出土。五輪塔の火輪部分である。一辺21.0cm、高さ10.7cmを測る。上面には径3.5cm、下面には径5cmの円形の柄穴が設けられている。側面には何も刻まれていなかった。

金属製品 (図27)

銭貨 (83~85)

寛永通寶 (83~85) は土壙62、溝53、土壙81より各出土。84は古寛永である。

土製品 (図版10)

土人形 (86~91)

86、87は土壙152、88~91は石組168より出土。86は高さ2.6cm、厚さ1.0cm、87は高さ2.6cm、厚さ0.9cm、88は高さ3.3cm、厚さ1.4cm、89は高さ2.5cm、厚さ1.1cm、90は高さ2.5cm、厚さ1.1cm、91は高さ2.7cm、厚さ1.1cmを測る。86、87、89~91は92のような押し型で作った頭部から胴体に、腕部分を貼り付けて成形する。

押し型 (92~95)

93は土壙152、92、94~95は石組168より出土。92は高さ4.0cm、厚さ1.1cmを測る。人形の頭部から胴体にかけての押し型である。93~95はすべて径2.1cm、厚さ1.1cmを測る。髑髏の押し型である。

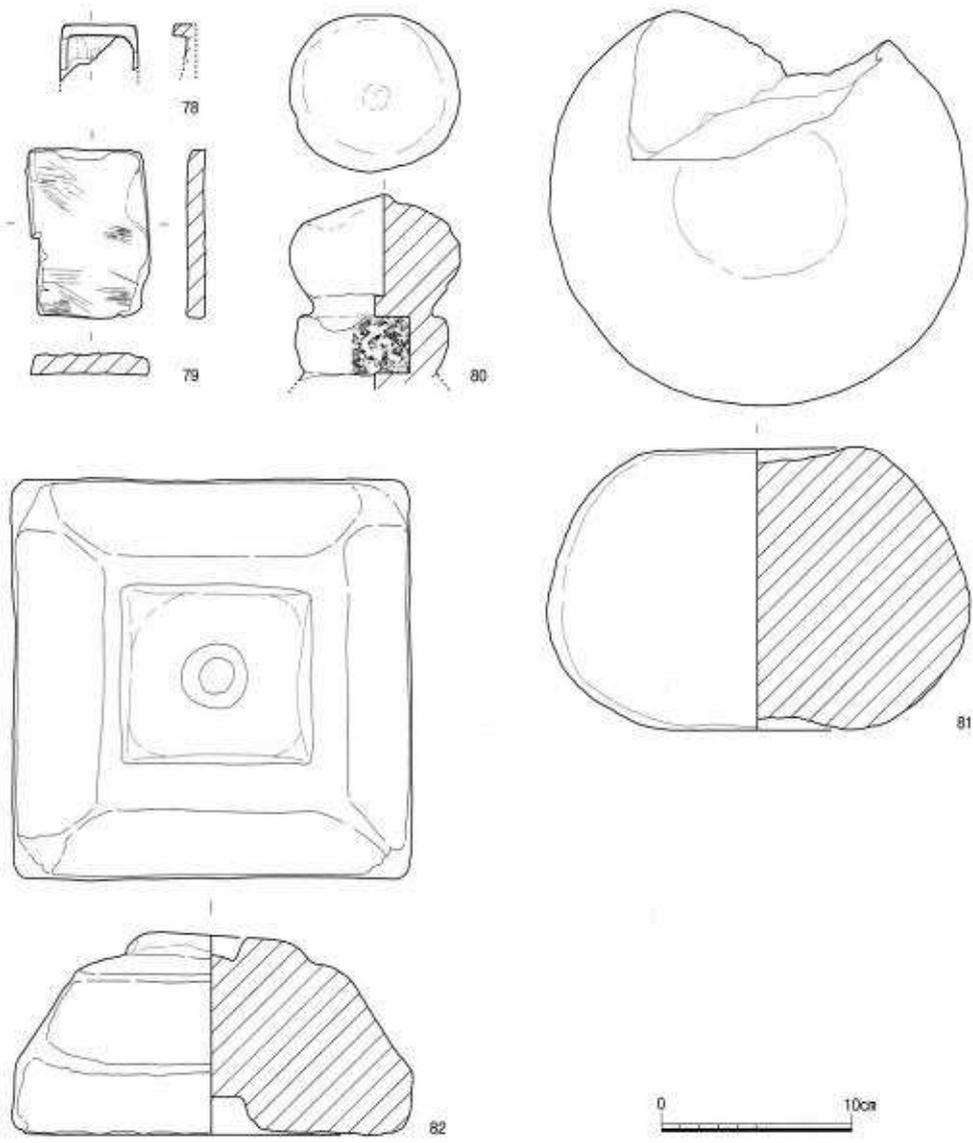


图26 石製品実測図 (1/4)

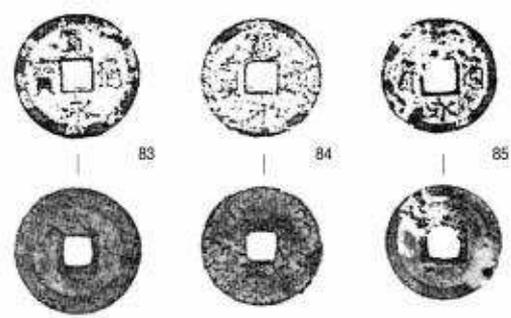


图27 錢貨拓影图 (1/1.5)

IV ま と め

今回の調査においては、古墳時代から奈良時代の竪穴住居と掘立柱跡、江戸時代から近現代にかけての土壌、溝、柱穴、井戸跡などを検出した。

調査地は、平安京遷都以前から山城国愛宕郡出雲郷と呼ばれ、出雲氏がこの地を治めていた。出雲氏に関する記述として、正倉院文書の神亀三（726）年「愛宕郡出雲郷計帳」に「愛宕郡出雲郷」がある。これは郷氏に課した税の台帳であり、戸籍簿にもあたるもので、これによると出雲国から移住してきた出雲臣を名乗る人々を中心とした名前が記されている。その中に出雲郷の中核をなしたと考えられる人物で、正六位下の位をもつ出雲臣大嶋が存在する。この大嶋を介して、出雲氏は中央政界とのつながりを持ち、奈良時代には舎人、兵衛、資人、帳内、史生といった官僚を多く輩出している。この出雲氏の氏寺であったとされるのが出雲寺である。これは現在の御霊神社（上御霊神社）であるとされていて、今回の調査地から南西170mの位置にある。神社境内からは奈良時代前期から平安時代の瓦が採集されているが、発掘調査はおこなわれていないため、伽藍配置などの詳細は不明である。しかし、『出雲寺記』や『山城名勝志』によると、延長四（926）年当時、金堂、講堂、食堂、鐘楼、経蔵などが記され、大伽藍をもつ寺院であったと分かる^{註4}。また、『延喜式』には盂蘭盆供養料を充てる諸寺の一つに「出雲寺」の名が見られ、『日本紀略』康保三（966）年七月七日条には「御霊堂・上出雲寺」で疫病流行の際に読経がおこなわれたと記されている。しかし、平安時代後期の『今昔物語集』巻二十第三十四話には、建立から歳月を経て荒廃した出雲寺の様子が記されている。その後、出雲寺がどういった過程で現在の上御霊神社に変遷していったのか、その詳細は定かではない。

2004年に相国寺境内北東に位置する承天閣美術館増築に伴い実施された発掘調査^{註5}で、7世紀半ばから後半の竪穴住居址群、8世紀初頭以降の掘立柱建物跡が検出されている。御霊神社からは約300mの距離に位置し、この住居址を形成していた集団が出雲寺造営と関わっていた可能性が指摘されている。同様に本調査地で検出した建物跡も、出雲寺から170mという距離から立地条件から考えると、寺院関連の施設や、集団の住居であった可能性を推察できる。

本調査地では、古墳時代から奈良時代の遺構とほぼ同じ高さの遺構面、もしくはその上面で、安土桃山時代に織田信長に寺号を与えられたといわれる西福寺の遺構を検出した。調査区東部は江戸時代から近現代の遺構を3面にわたって確認し、天明の大火による焼土や焼けた瓦を含む瓦溜り、瓦を敷き詰めた雨落ち溝とその水を地中に落とす礫を充填した土壌、東方向に直角に曲がる区画溝と考えられる遺構を検出した。また調査区西半では、便所甕もしくは水甕として使用されたと考えられる埋甕遺構、土管を用いた排水枡と考えられる石組遺構など、西福寺が昭和39年に岩倉に移転するまで使用されていた施設を確認した。

以上、今回の調査では、江戸時代から近現代に及ぶ西福寺の関連施設を確認するとともに、古墳時代の竪穴住居址、奈良時代の建物遺構を検出した。御霊神社の前身であると考えられる出雲寺との関連が推察できるこれらの遺構は、出雲郷、出雲氏について新たな資料を提供するものであり、今後の出雲氏の研究に資するものとする。

註1 『角川日本地名大辞典 26京都府』角川書店 1991年。

『日本歴史地名体系27 京都市の地名』平凡社 1979年。

『平安時代史事典』角川書店 1994年。

『史料京都の歴史1』平凡社 1970年。

『京都坊目誌 京都叢書』臨川書店 1968年。

註2 東 洋一・能芝妙子『相国寺旧境内』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年。

註3 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

註4 前田義明「御霊神社境内の採集遺物」『研究紀要』第10号、（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年。

註5 註2と同じ。

報告書抄録

ふりがな	かみぎょういせき
書名	上京遺跡
副書名	上御霊中町の調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	水谷明子
編集機関	古代文化調査会
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
発行年月日	2015年10月20日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみぎょういせき 上京遺跡	きょうとし 京都市 かみぎょうく 上京区 かみつりょうなか 上御霊中町	26100	224	35度 02分 15秒	135度 45分 36秒	2015.06.08 ～ 2015.07.30	390㎡	マンション 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上京遺跡	集落跡	古墳時代 ～ 奈良時代 江戸時代	竪穴住居、土壇、柱穴、溝、 井戸	土師器、須恵器、国産 陶磁器、瓦類、石製品、 銭貨、土製品	

	Aランク点 数 (箱数)	内 訳	Bランク (箱数)	Cランク (箱数)	出土箱数 合計
点数及び箱数	95点 (5箱)	土師器36点、須恵器4点、焼締1点、施 軸陶器9点、染付5点、軒瓦16点、刻印 瓦6点、石製品5点、銭貨3点、土製品 10点	61箱	0	66箱

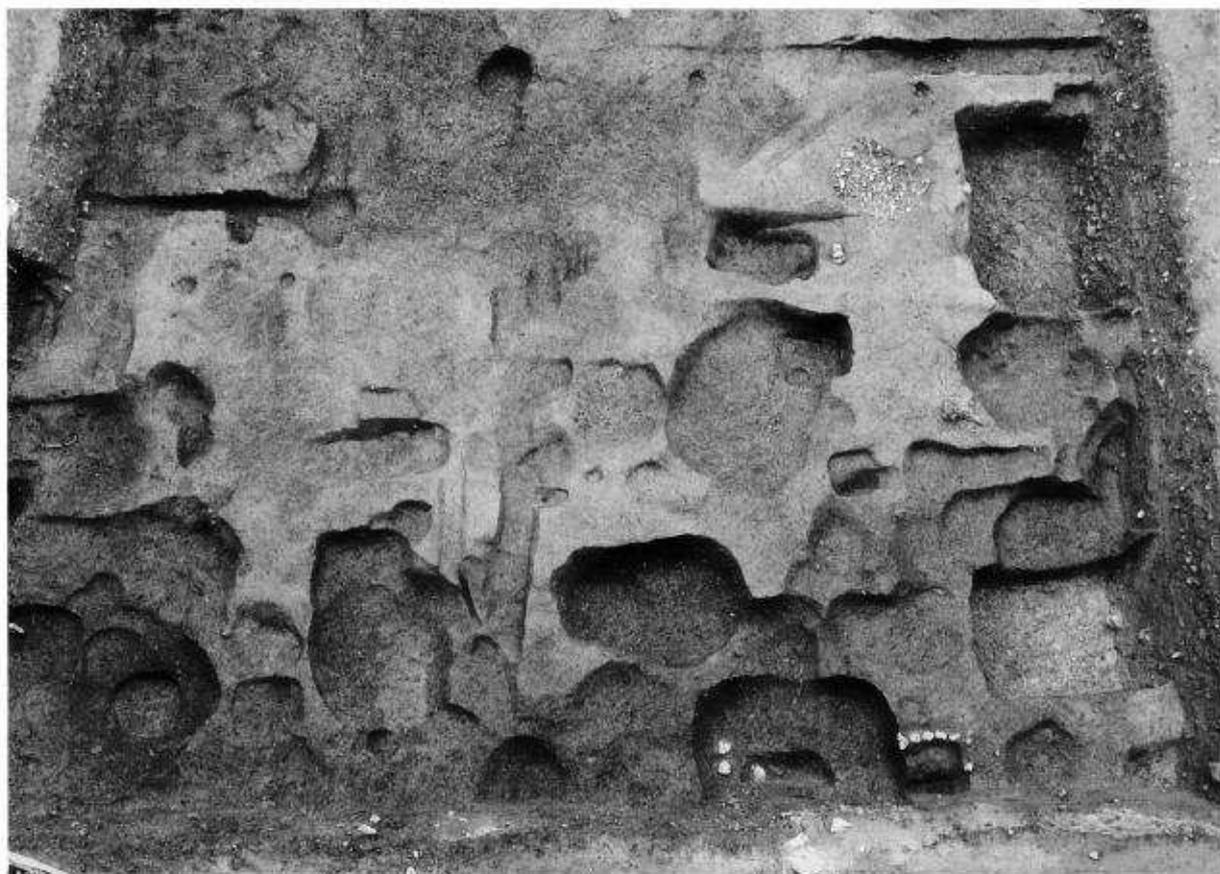
版 图



1 東半部第1面全景（北東から）



2 東半部東部第2面（北東から）



1 東半部東部第3面（東から）



2 東半部第4面全景（東から）



1 東半部第1面北東角部（北東から）



5 土壙15（南から）



2 東半部第1面南西角部（北東から）



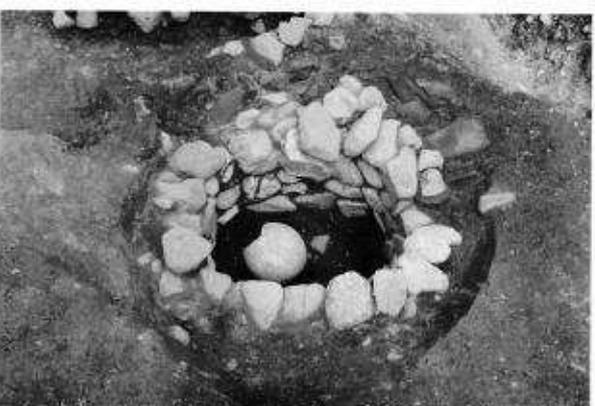
6 土壙81（南から）



3 土壙47・溝53（北東から）



7 石組95（南東から）



4 石組58（西から）



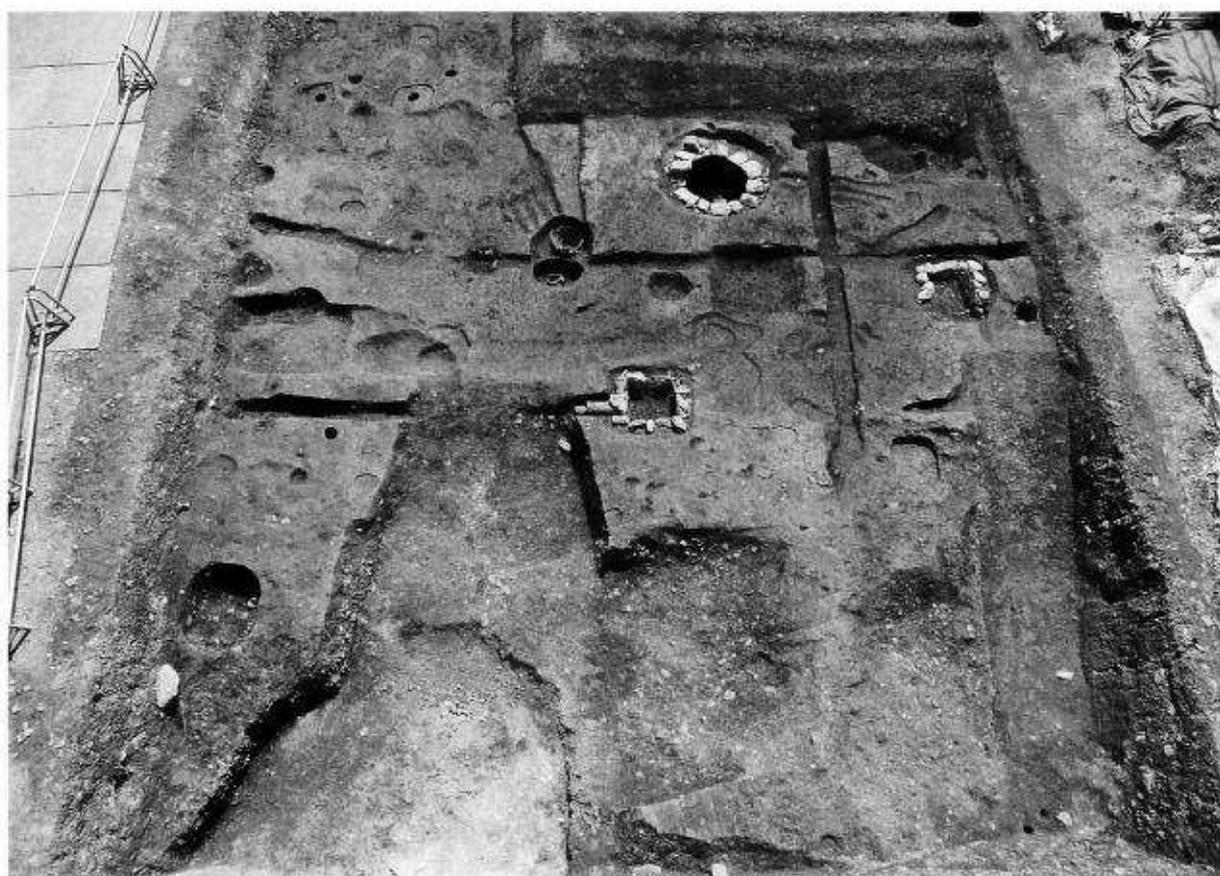
8 土壙109・107（東から）



1 建物1 (北東から)



2 建物2 (北から)



1 西半部第1面全景（西から）



2 土壘170・171（南から）



4 石組168（北西から）



3 石組146（南から）



5 竪穴住居175（東から）



5



17



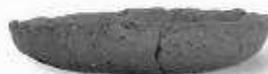
9



41



10



42



11



44



12



45



16



46



22



47

柱穴131 (5)・土壙109 (9~12・16・17)・土壙170 (12)・土壙15 (41・42・44~47) 出土遺物



50



59



56



60



57



61



58



62

土壙15 (50) · 柱穴6 (56·57) · 土壙81 (58~60) · 土壙84 (61) · 溝53 (62) 出土遺物



63



67



64



68



65



69

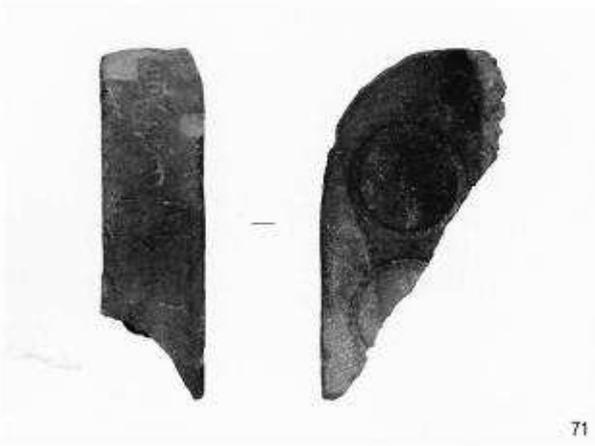


66



70

溝53 (63) · 土壙84 (64) · 土壙81 (65~67 · 70) · 土壙105 (68) · 土壙156 (69) 出土遺物



71



78



72



80



73



74



81



75



76



82



77

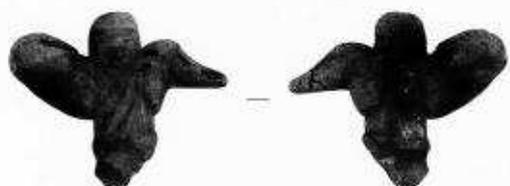
土壙62 (71・76)・溝53 (72~74)・土壙81 (75)・土壙86 (77)・土壙84 (78)・土壙76 (80)・石組58 (81)・石組168 (82) 出土遺物



86



91



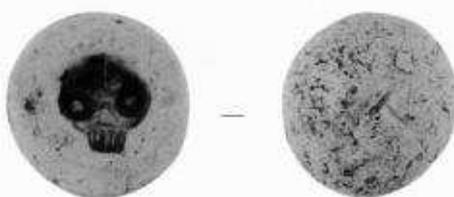
87



92



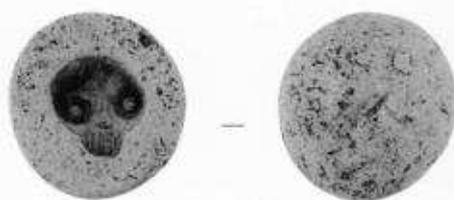
88



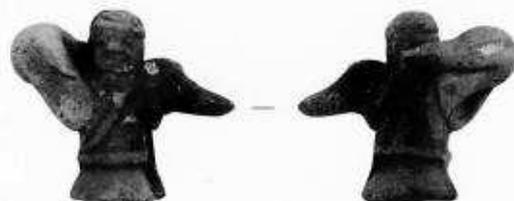
93



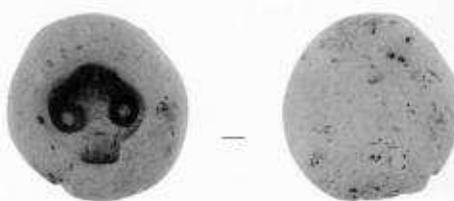
89



94



90



95

上京遺跡

—上御霊中町の調査—

発行日 2015年10月20日
編 集 古代文化調査会
発 行
住 所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL (078)857-6368
印 刷 真 陽 社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034